

# 第9回全国中学校(教科)柔道指導者研修会



**第9回全国中学校(教科)柔道指導者研修会(主催=日本武道館・全日本柔道連盟、後援=スポーツ庁)は10月26日から28日までの3日間、日本武道館研修センター(千葉県勝浦市)で、講師15名・記録2名・参加者74名が集まって行われた。**

**本研修会は平成24年度から完全実施された中学校武道必修化の充実に向け、日本全国で柔道を指導する中学・高校・大学・実業団等の指導者を対象に伝達講習のできる中核的指導者を養成するとともに、各都道府県において柔道を専門としない中学校保健体育科教員の授業力向上に資する目的で開催された。**

## ■1日目(10月26日)

開講式では、はじめに野瀬清喜全日本柔道連盟常務理事・教育普及・MIND委員会委員長が挨拶に立ち、「全国の中学校から多くの参加者を得て実施することができて喜ばしいことです。特に今年は柔道を専門としない方、女性も多く参加されています。安全で効果の上がる授業を目指して、実り多き研修会となることを期待しています」と述べた。

続いて、三藤芳生日本武道館常任理事・事務局長が挨拶に立ち、「本研修会は柔道初心者の先生でも、安全で楽しく効果の上がる授業が展開できるよう、指導現場で活かせる内容となっています。一番勉強しなくてはならないのが指導者です。研修会で学んだ指導力を発揮して、子供たちを立派に育てていただくことを期待します」と述べた。

次に『中学校武道必修化指導書』武道編DVDを視聴した。加えて、磯村元信講師(全日本柔道連盟重大事故総合対策委員会委員長)より、柔道体育授業の事故事例が報告された。

最初に、田中裕之講師による講義「教育に生かす武道の心」が行われた。主な内容は次の4点であった。

- ①新学習指導要領に示された3つの柱「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」は、武道の修行段階である「守」「破」「離」に置き換えることができる。さらに柔道の創始者嘉納治五郎師範が唱えた「精力善用 自他共栄」につながるものでもあり、教育の基本は、武道の教えに通じるものがあるといえる。
  - ②教育現場では、表面的理解ではなく本質的理解を求めよう変化している。大学入試改革では、「知識を問う」から「知識の活用能力を問う」内容になることも検討されている。小中学生から考えて判断することが求められるようになり、保健体育においても同様である。
  - ③教育としての柔道を考えたとき、柔道を通してどのような能力を子供たちに身につけさせるか。「強くなる」「けがをしなくなる」「礼儀正しくなる」「優しい心が育つ」「考える心が育つ」「視野が広がる」「自信がつく」などがあげられる。
  - ④学校現場で柔道指導する上で、「真の教育とは何か」を改めて考えていただきたい。
- 続いて、向井幹博講師による「基礎知識・導入・礼

法」の講習が行われた。はじめに講道館制作の柔道紹介映像を視聴、次に柔道の特性を解説し、安全指導について「柔道の基本は身を守る技術である『受け身』であり、指導者が安全に対する意識を怠らなければ事故は起こらない」と指導者が常に安全の意識を持つことの重要性を説いた。講義に続き、大道場へ移動して、「立礼」、「座礼」、「座り方」、「立ち方」の指導を行った。

引き続き、高橋健司講師が「基本動作」の講習を行った。姿勢（自然体、自護体）、「体さばき」を中心に解説しながら指導した。「保健体育科教員として、『授業規律を守ること』が大事であり、学校の活力にもつながる。柔道授業は、ケガをしない、させないことが第一。投げ捨てない、同体で倒れない、倒れたらすぐに立つなど、大事なことはしっかりと伝えてほしい」と安全面の配慮を強調した。

## ■2日目（10月27日）

2日目の講習は、実技助手として国際武道大学柔道部の協力を得て行われた。高橋(健)講師が前日の復習を兼ねて、「崩し」「体さばき」を指導した。続いて、鮫島康太講師による「受け身」の講習が行われた。主な指導内容は次の5点であった。

- ①ポイントは、「身体を丸くする」「畳を叩く」「頭を打たない」の3点。
- ②低い姿勢から始めるなど、段階的に指導することが大切。
- ③指導者が正しい「受け身」を示範することにより、生徒の関心も高まる。
- ④完璧な「受け身」ができなくても、技に入ることができる。
- ⑤「受け身」の練習は飽きやすいので、工夫が必要。

次に遊佐英徳講師による「固め技」の指導が行われた。抑え込みの定義、「相手を仰向けにする」「概ね相手と向かい合う」「相手に束縛されない」の3点を説明し、『中学校必修化指導書』に沿って、「けさ固め」「横四方固め」を解説した。「授業ではどうやったら抑え込めるか、逃げられるか、子供に考えさせるのも効果的である」とポイントが示された。

続いて、「柔道初心者を対象とした指導法」と「基本習得者への指導法」の2組に分かれて、初心者グループは鮫島講師による「投げ技の発展」として、「体落とし」「膝車」から「受け身」につながる講習、経験者グループは森英也講師による「基本を習得した3年時の指導」として、「釣り込み腰」「背負い投げ」「大内刈り」「小内刈り」の講習が行われた。

昼食・休憩を挟み、午後からも引き続き2組に分かれて、初心者グループは、米田輝彦講師、梶谷宗範講師による「投げ技」の講習として、「大腰」「膝車」「体落とし」の指導が行われた。経験者グループは、坂井武彦講師による「技の連絡、変化」、福井学講師による「投げ技の自由練習」、與儀幸朝講師による「固め技の自由練習」の講習がそれぞれ行われた。

実技講習を終え、実技に関する質疑応答が行われた。柔道を専門としない女性教員から、「移動しながら技をかけると、足に気を取られて上半身を崩すことを忘れてしまう。どうしたらよいか」という問いに、鮫島講師は「難しく考えず、まず、授業ではケガをしないように、いかに楽しく柔道に取り組みせるかです。やっていく中で技の原理に興味をもってもらえたらいいのでは」と答えた。

続いて、研修室へ移動して「研究討議」が行われた。初日・2日目に行われた「礼法・基本動作」「受け身・投げ技」「自由練習」など8つのテーマから希望するテーマを選び、それぞれ討議を行った。「体育館に畳を敷くのに時間がかかる」、「生徒の恐怖心を取り除く方法」、「年10時間では技の習得に至らない」など各学校の現状、課題が次々と出され、それぞれの講師が助言を行った。

## ■3日目（10月28日）

前日の研究討議の結果について、各グループの代表者が討議内容を発表した。

続いて、熊野真司講師による「新学習指導要領と柔道」の講義が行われた。主な内容は次の3点であった。

- ①柔道授業のアンケート結果について、柔道実施の中学校は約6割で大きな変化はない。指導者の9割以上が柔道を専門としていない。保健体育の授業について、好きと答えた生徒は84%、その内、柔道が好きと答えたのは約60%であった。
- ②これからの柔道授業に向けて、基本動作の段階から「攻防」を一つの柱として、全体を組み合わせることが大切ではないか。
- ③評価について、多様な方法があることを紹介し、その中で「ルーブリック」の評価表を配布し、参加者が評価項目を考える演習を行った。

すべての講習が終了し、木村昌彦講師が、「柔道指導者に伝えたいことは、『自分も楽しむ』『事故は絶対に起こさない』『専門を活かす』。特に柔道が専門でない先生は、自分の専門種目の表現を活用して考え、伝えることが大切。常に学ぶことを忘れず、柔道の魅力を伝えてほしい」と総括し、全日程が終了した。